



TITLE:

臺灣日蝕紀行

AUTHOR(S):

井本, 進

---

CITATION:

井本, 進. 臺灣日蝕紀行. 天界 1942, 22(248): 56-57

ISSUE DATE:

1942-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168330>

RIGHT:

## 臺灣日蝕紀行(1)

井 本 進

昭和16年9月17日(水) 午後八時三十分發

夕方より降り出した雨は、出發の頃、幸ひにも止んだ。大トランク一個と傘も持たずレインコート國民服着用と云ふ簡易な旅行に上ることとした。汽車は大阪始發の午後9時35分だつたので、混雑しなかつた。神戸の郵船に依頼して居た基隆港の海圖が出發直前に着いたので、列車中で夫れを見ることとした。

此度の日蝕觀測は1年程前より計畫して居たが、六月頃より基隆要塞地帯内撮影の許可願ひの手續を始めた。色々と手續上手間取つて、漸く九月5日附にて基隆要塞司令部より撮影許可證地帯撮影第50號が届いた。許可は基隆市街のみに場所が特定されて居て、「渡臺と同時に當要塞司令部に出頭し所要の指示を受けること」となつて居た。その爲、渡臺と同時に先づ同司令部を訪れる豫定である。列車は一路西へ西へ走つて居る。

9月18日(木)

夜が明けた。よい天氣である。朝7時42分下關着。それより關門連絡船に乗船し、海峽を渡る。中國の西端と九州の東端相接する處、潮流迅く、山々街々は指呼の間に見える。門司に上陸して後、荷物を船まで配達して貰ふ手續をする。出帆は正午だつたので、土産物を買ふ爲め市街に行く。今回の旅行の準備の爲め、宅では寸暇も得ず、遂に散髪を門司ですることとした。

携行のウォルサム時計を、出發前、大阪の時計屋に掃除させたが、途中にてラジオの時報に合はせつゝ来る内、1時間に3秒も遅れることを知つたので、門司の時計屋に立寄り、調整して貰ふ。

愈々高砂丸に乗船。ランチにて船に着く。船室は二等三號室、圖らずも乗船後間もなく山本一清博士に會ふ。よい處で出合つたものだ。

其の爲、船中退屈することなく、天文の御話を聞きつゝ航海出来ることとなり、好都合であつた。

山本博士は富貴角近傍の石門と云ふあたりを觀測候補地に豫定して居られた。基隆は氣豫狀態がよくない様だから、基隆は行かない方がよいとの事であつたので、結局、山本博士に同行することにした。

之より先、出發前、臺北の蔡章猷君より電報があり、何處で觀測するか？との事だつたので「基隆東北部なり」と返電したが、更に同君より電報にて、「許可あるか？富貴角宜し」と問合せがあつたので、「許可あるも宜敷き處頼む」と更に電報した次第でもあつた。

海圖室に行き擔當の船員に石門の位置（經度緯度）を知る爲め、海圖を見せて貰ふ。又、石門への交通の便を尋ねたが、も一つ不明であつた。然し、後刻石門位置は  $25^{\circ}17'.5N$ ,  $121^{\circ}33'.5E$  であるとの報知を受けた。

參謀本部五萬分の一の地圖が手に入れば容易に判ることだが、無いので精密なポジジョンが得られないのである。

船中の第一夜は次第に暮れて行く。同じ觀測行の方があつた。鹿兒島高等農林學校物理學の藤瀬四郎教授と同校學生坂上務氏であつた。藤瀬教授は日蝕を兼ねて臺灣の地質研究にお出でになるのである。それから、今治の回漕店主飯義壽氏、大阪の絹織工場御經營の吉田長祥氏、宮崎縣延岡の渡木慶雄氏も同船であることが判つた。皆、日蝕觀測のため渡臺されるのであつた。夜遅くまで雜談に過ごす。波は高く船はローリングする。（つゞく）

## 日蝕の友より

拜啓 先日は、わざわざ臺灣迄お出かけ下さいました節は、私共會員に色々御指導下され洵に有難く感謝致して居ります。

先生も御無事にお着の事と存じ陰ながら安心致して居ります。

待ちに待つた九月21日も、惡天候に禍ひされ、充分に觀測する事も出来ませず、残念に思ひましたが、4度ばかり（ほんの瞬間ではありますが）コロナを觀望出来、満足に思つて居ります。

一番心に残りましたのは、皆既に入る瞬間、先生のゴ1の御聲と共に起つた息づまる様なシーンで、何かドスンとしたものを感じ、あとは、何が何やらボォーとして、今思ひ出しても、夢の様です。時々、ふと、あの中學生兩君が讀み上げて居ました時計のカウントの聲が耳に甦つて來ます。

當日、撮影致しました部分蝕とプロミネンスは、あの望遠鏡を使ひ、なれないのか、不面目ながら、同封の部分蝕1枚しか出来ませんでした。御笑納下されれば幸甚と存じます。使用器械は7センチ手動屈折赤道儀。乾板はオリエンタル・プロセス、7種を口径1時に絞り、F25、 $\frac{1}{200}$ 秒で切り、フィルタ1はバートシナ。印畫紙はフジの利根。撮影時は12時17分00秒。尙當日私が觀測隊の方々を撮影致しました記念寫眞を贈呈致します。御笑納の程。

いよ々々火星も接近致しました。天氣を心配しながら待つて居ります。

地理的に恵まれた臺灣に居ります私共に、今後何かと御注文を下され、御指導と御鞭撻を賜り度お願い致します。御期待には沿ひ得る事は出来ませんでせうが、一生懸命に致すつもりです。

昭和16年十月1日

和泉三思